

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ (二八)

第五五則

雪峰飯頭

〔示衆〕

衆に示して云く、氷は水よりも寒く、青は藍より出ず。見は師を過えて、方めて伝授するに堪ゆ。子を養うも父に及ばずんば、家門は一世にて衰う。且らく道え、父の機を奪う者は、是れ甚麼人ぞ。

〔本則〕

挙す、雪峰、徳山に在つて飯頭と作る。一日、飯遅し。徳山、鉢を托げて法堂に至る。峰云く、この老漢、鐘未だ鳴らず鼓未だ響かざるに、鉢を托げて甚麼の処に向つて去く。山、便ち方丈に帰る。峰、巖頭に拳似す。頭云く、大小の徳山、未後の句を会せず。山、聞いて侍者をして巖頭を喚ばしめて問う、汝、老僧を肯わずや。巖、遂に其の意を啓す。山、乃ち休め去る。明日に至つて陞堂するも、果して尋常と同じからず。巖、掌を撫ち笑つて云く、且喜すらくは老漢、未後の句を会す。他後、天下の人、伊を奈何ともせじ。

今回は、唐末の禅匠、雪峰義存（八二二〜九〇八）に関する一則です。雪峰さんがテーマの則では、すでに第一六回で「雪峰看蛇」がありましたね。ただ、それは雪峰山での機縁でしたが、今回は雪峰がまだ徳山（湖南省常德市）での修行時代に、飯頭という食事係をしていた時の機縁。時の徳山住持は宣鑑禅師（七八〇〜八六五）。もとは金剛經の研究にすぐれ、「周金剛」といわれた学者でしたが、のちに禅門に入つて極意をえた人。「臨濟の喝」と並んで「徳山の棒」という厳しい禅風で知られています。青原下第五世に当り、法嗣にはこの則に登場する雪峰義存と巖頭全齋という、すばらしい両英傑を輩出しています。

今回は「本則」がたいへん長いので、紙幅の都合により万松さんのコメント「著語」は割愛しました。それでも「示衆」は万松さんのことばです。まず、これをみましよう。

「氷は水からできて水よりも冷く、青は藍からできて藍よりも青い。弟子の力量は師をこえて、はじめて仏法を伝えられる。子を育てても不肖の子では、その子の代で家は傾く。いったい。師の機を奪うような大人物はだれかな。」

おおよそ、こんな意味です。氷と水のたとえは、古典の「荀子」にある有名なことば。また弟子の力量のことは、「見が師に斉しければ、いまだ師の半徳を減じ、見が師を過ぎ



雪峰飯頭

て、はじめて師の法を伝えるに足る」という、唐代禪門でさかんにいわれた厳しい伝統です。この則ではワキ役の巖頭も、のちに師の徳山を去るとき、右のことばをのこしたと伝えられています。ここでは万松さんが、雪峰と巖頭の両弟子による師匠の徳山をこえた禅機をたたえているのです。

さて「本則」です。例によって意識してみましよう。

「雪峰が徳山のもとで食事係をしていた時、ある日、昼食が遅れた。すると徳山が食器をささげて本堂を通りかかった。雪峰が見て、『この老僧、まだ合図もせんのにどこへ行くつもりだ』。徳山は黙って方丈に戻る。雪峰が巖頭にこれを話す。巖頭『さてはさすがの老僧も、まだ最後の一句を会得しておらんようだ』。徳山が聞いて巖頭を呼ぶ。『君はワシを認めておらんのか』。巖頭が真意をうちあける。徳山はまた引っこんだ。翌日、徳山の説法はいつもと違う。巖頭が笑って、『よかったなあ、老僧が最後の一句を会得しなされた。もう誰も歯が立つまい』と。おもしろいですね。だけど、むずかしい。難語としては、「拳似」はとりあげて示すこと。「大小」は俗語で「さすが」という感嘆。「末

後の句」はギリギリのことは、とどめを刺す語。「陞堂」は説法。「且喜」は俗語で、まずよかった、まあ喜ばしいこと、の意味。「他後」は後日のこと。こんなふうに表示上の意味はわかってても、そこから先が問題。

たとえば、徳山は合図もないのに、なぜ鉢をささげて行ったのか。雪峰からとがめられて、なぜ黙って方丈に帰ったのか。巖頭が打ち明けた真意とはなにか。それを聞いた徳山が、なぜ引っこんだのか。翌日の説法が変わったのはなぜか。このように、いくらでも疑問が出てきます。これを解くのが本則の眼目。

そこで助け舟の万松さんのコメントを手がかりに、考えてみましょう。まず、徳山が鉢をささげて出かけたのは「度生の心」、黙って帰ったところに「無量の言語がある」と万松はいいます。つまり、徳山は奇行を演じたのではなく、雪峰に生きた仏法のはたらきを見せたのです。雪峰も役職の上からは師弟の関係ヌキだからこそ、遠慮なく師を叱った。それをすなおに受けた徳山の態度を、万松は高く評価しているのです。師匠づらをしていないのが、なによりもよいのですね。

徳山宣鑑の頂相と伝記（仏祖道影）



師簡州周氏子侍觀澤衣染淨曰更後何不下去師便出卻回日外面羅羅懸懸度矣師挽接淨便吹滅師大悟便禮拜曰子見何甚感師曰從今向去更不疑天下老和尚舌頭也來日澤座曰可中有個漢牙如銀樹口似血盆一棒打回頭他時向孤峰頂上立吾道去在師將踏鉢堆法堂舉火焚之師後唐懿宗咸通六年五月告衆曰捫空追擊勢決心神夢覺竟非竟有何事端坐而孤證見性禪師贊曰吹滅燈炬光明洞達豈翻權機三心無著無吞佛祖叔呼菩薩白棒一條啊喇喇喇

この師匠の態度を雪峰から聞いた巖頭は、さすがは師匠だとうなづいた。にもかかわらず師はまだ最後の句を会得していないといったのは、雪峰にそれをわからせるための老婆心から隠したのだ、と万松はいいます。つまり、徳山に呼ばれた巖頭が打ち明けた真意とは、このようなことでした。それを知った徳山は、また黙って引っこんだ。万松はこの徳山の態度を絶賛しています。これこそ真の「不会」だと。会や不会をこえた働きたというのです。

たしかに、道場の指導者として一言ありそうなのに、愚直なまで

に弟子たちの言い分をすなおに受け入れる。これはできないことです。ましてや、棒を振ったという厳しい禅風の持ち主にあつては。いや、そういう見方こそが現代人の分別であつて、「棒」の禅風などのレットルに固定されない自由人として、唐代のおおらかな人間性を示しているのです。徳山は翌日の説法で様子が一变した。万松は「風向に随つてカジをとる」とコメントしています。一段とあざやかな内容だったのでしよう。そこで、あらためて巖頭は師匠をほめたたえた、というわけです。

こうしてみると、この則は、まさにこの子にして親あり、この親の所に子あり、の感がします。しかも巖頭の力量は雪峰にまさり、けつしてワキ役ではなく、むしろ主役です。「雪峰飯頭」のタイトルは万松さんの命名でしようが、これは巖頭よりも後世に著名となった雪峰の名に眩惑されたのかも知れません。本来は「巖頭撫掌」とでもすべきでしょう。

道元禪師は、七歳の童女でも勝れた所あればわが師なり、といわれます。まさに「道の前に師弟なし」。求道のためには年令も年功も捨て去り、すなおに精進いたしましよ。

〈一泊参禅会〉



今年で一五回目となりました。一泊参禅会は、平成二二年六月一日(土)～二日(日)の両日にわたり、龍泉院で実施されました。あいにくの雨模様でしたが、二名の参加をえて、静寂さの中の緑陰坐禅となりました。今年の一泊参禅会は、次の差定により行われました。

第一日

上山 午後二時
開講説明 午後二時二〇分

坐禅 午後三時

禅講 午後三時四〇分

薬石 午後五時

坐禅 午後七時

坐禅 午後八時

開枕 午後九時

第二日

振鈴 午前四時

暁天 午前四時二〇分

行茶 午前五時

坐禅 午前五時三〇分

朝課 午前六時一五分

坐禅・小食 午前六時四〇分

坐禅 午前八時三〇分

禅講 午前九時一〇分

行茶 午前一〇時三〇分

坐禅 午前一一時五〇分

中食 午前一二時四〇分

下山 午前一二時四〇分

禅講は椎名老師の提唱による「受



食五観訓蒙。昨年の一泊参禅会に次いで二回目となります。

江戸時代の面山和尚(一六八三～一七六九)が書かれた、唯一の「五観の偈の解説書」となっています。昨年は総論と各論(一)、今年は(二)～(四)でした。

食事役の典座は去年に引き続き松井さんが引き受け、おいしい混ぜご飯をいただきました。また補佐役として武田さんが煮物を、調理にあたって女性陣、加藤さん、小畑さんの面々に強力な支援をいただきました。

お寺からはらつきょうを、また会員の方からたくさんのお

菓子を頂戴しました。おかげで修行にしては豪華な食事となりました。感謝申し上げます。

雨の音を聞きながらの坐禅が、えって良かったと言う声もきかれましたが、ひとしきり激しく降っていた雨も昼にはすっかりあがり、参加者は充実した二日間を終えて、晴れ晴れとした表情で下山しました。

坐禅と仏縁

一泊参禅会雑感

船橋市 阿部 史子

その朝、天徳山龍泉院の山門、両側に聳える老杉、本堂の大屋根を正面に見ながら参道を歩いていく自分。幾度も踏んだ道ですが、

初めての一泊参禅会に臨む今回は特別緊張しておりました。でも大悲殿の受付に着いた時には、総て仏様にお任せし、椎名御老師、諸先輩方に倣い、只自分なりに勤めようと覚悟は出来ました。

オリエンテーションの後、早速第一柱目の坐禅に入りました。丸柱の横に入る時の足に留意し歩を進め、本堂内左側大悲殿と庭の臨める硝子戸の前に単をとり、坐りました。まだ半跏趺坐しか組みません。初回参禅の折、小畑様に側に付いて頂いて坐禅の作法の

参加者は以下の通りです。

導師 椎名宏雄老師

小畑節朗、三町 勲、中寫宏誠、

安本小太郎、五十嵐嗣郎、添田昌

弘、清水秀男、宮本 茂、今泉房

子、大坂昌宏、大坂晶子、里深徳

一、美川武弘、美川恒子、松井 隆、

加藤 孝、久光守之、増田 進、

阿部史子、杉浦上太郎、武田博志

(以上二一名)

一からを穏やかな口調で丁寧に御指導賜ったことが思い出されました。

御老師の入堂、止静鐘が鳴り、間もなく「むやみに動かない！」という御老師の大音声で堂内に響き渡りました。その大喝に一瞬ビクツと致しましたが、そのお声がお腹の底まで届き、これからしっかり坐るんだという覚悟も新たに

なりました。参禅会を無事終えた後、あの一喝は御老師が、第一柱こそ大切、今この時の坐禅は只一回きりの掛け替えの無い坐り、真剣に取り組む心構えを御教示賜ったのだと忘れ得ぬものになりました。

龍泉院本堂での坐禅は、私にと



って特別な意味があります。それは私の大切な亡き愛する人と共に坐していると実感できることです。それゆえ如何なる名利寺院での坐禅よりも真剣入魂出来る思いです。初めての一泊参禅会がこの菩提寺であったことが参加希望の第一理由です。今年一月入会を許された新参をも顧みず参禅させて頂きました。

思えば父が一四年前に逝き、その時初めて龍泉院様・椎名御老師と御縁が繋がりました。父(享年七三才)は葛師の開業医院を閉め、柏を終焉の地と定め、居を移して僅か半年後、他界してしまいました。その折、柏、船橋辺りの曹洞宗寺院を幾つも弟達と探し歩きました。御縁あってこの龍泉院様に菩提寺としてお世話になることをお許し頂いたことは、父が導き用意してくれた仏縁と思います。一期一会、一度の人生に真の師として仰ぎ付いていける師、厳しく且

つ温かい椎名御老師に邂逅出来た仏縁に因る幸せを心から感謝しております。しかし父の死後、この貴重な仏縁、御老師の御指導を積極的に頂く姿勢無く日々を慌ただしく生きた自分を顧みる時、その愚かさを恥じ入ります。

父の死後一〇年、また悲風が吹き、悲しく辛い事がありました。それまでの人生観・価値観が全て崩れ、生きる気力も失う程の真只中であって、御老師の御慈悲溢れる御指導に救われ、此処まで来ました。そして今、参禅会の一員に加えて頂いて、この本堂に坐している自分が居る。これを仏縁と言わずして何と言えようかと思いません。

幾つもの悲風が吹き、仏教というものへの考え方が根底から変わりました。それまでの葬式仏教もしくは苦しい時の神(仏)頼みではなく、生きていく自分が法灯明・自灯明を心の松明として、より深く真実の姿に立ち返る生き方を求めることが仏道であり仏教であること。そして先に逝った愛する人が、その死をもつて教示し、私を導いてくれていると考えるようになり、更にそれを実践して生きてこそ、亡き人に報いる鎮魂、供養ではないかと思えます。

こんなことは、諸先輩方には自明の理で笑われるかもしれませんが。悲しみ苦しみと正面から向き合ってこそ、その先の自分の生き方が見えてくる。自分に素直になり様々な虚飾を削りとって、まぎれぬことだからさせて頂くなど、三年余の月日を経て漸く全てを受け入れる自己に到達したいという心境に到り、参禅に参れるようになりまし。御老師は常々「為坐禅」を厳しく戒められており、私も自戒致しております。只まだもがいている最中の未熟な私は、今はまだタメ坐禅であろうが、まず坐って己と向き合うことから始めなければなりませんでした。

一泊参禅会は、一日目三炷、二日目四炷と計七炷の坐禅が用意され、只坐る坐るの連続。一炷がその時の集中度に拠って長くも短くもなりました。薬石後の二炷目、夕闇迫り六月の雨が静かに降る庭に面しての一炷は、特に心静まる心地良い体験でした。ほの暗い本堂に全員で唱和する「普勸坐禅儀」が静かに流れ、個々に集中した後、共に和する安らぎの時でした。

その夜は勿体無くも、女性参加者三名は書院に休ませて頂きました。大坂様、今泉様の両先輩方と枕を並べ、女性同志心通う一夜も

思い出深いものとなりました。お二方のお陰で教えられ励まされ、優しいお心遣いが心強く、心より感謝致しております。

この度小畑様、武田様、松井様が大切な典座役を務めて下さいました。お味・色彩・温度まで悉く行き届いた小食・中食・薬石・行茶は、お骨折りに思いを馳せ有り難く、美味しく頂戴致しました。また私は今回この食することを通して、坐禅の真髓の姿に触れた気がしました。小食・中食・薬石等その都度、椎名御老師と御一緒でした。御老師のお召し上がりになる御様子を伺い見て、食物、その作り手、係わった総てのものに感謝し、食する時はひたすら食に徹



するお姿に感動致しました。三年前、大本山永平寺に参籠した折の、宮崎奕保禅師様のお説法をハッと思い出しました。このことだーと。

「ご飯食如来、掃除如来、歩き如来すべて成り切る行持こそ坐禅、即ち仏道修行である」とのお言葉でした。

修証義と母

母孝子（享年八六才）は五月七日癌で亡くなった。昨年八月末に体調が悪いと相模原市橋本の総合病院で診察を受けたところ、小細胞癌の三期で、脳や骨髄に進行する恐れがあると診断された。医長は、母が高齢のため抗ガン剤治療は副作用があるので、放射線治療をはじめた。放射線治療の結果は順調で五センチ程あった黒い影が一センチ位に小さくなり体力も回復し、医長から自宅治療をするようにいわれ、昨年一月下旬に退院し相模原の兄の家から通院治療をしていた。

元より小畑様、幹事の杉浦様、武田様はじめ皆様のやわらかい心、有り難い助言に支えられてのこと、厚く御礼申し上げます。

椎名御老師の口宣の「一発心は千億の発心なり」を座右に、「人は皆仏法の器なり、修行すべくは必ず得べきなり」を目標に据え、大変難しいことですが、日々の家事・介護を「遇一行修一行」の心で勤められるよう精進したいと思いません。今後ともよろしく御指導お願い申し上げます。 合掌

流山市 中島 宏誠

流山の我が家には昭和四〇年から約一五年一緒に暮らしており、その後も月一度は泊まりに来ていた。今年の正月には暖かい房総半島白浜に妻、子供、孫、一〇人で泊まりがけの旅行に行った。

退院後のある日、我が家に来た時、永平寺で録音した「修証義」（解説付き）、蟬の音が読経と一緒に録音されている「同時行」のテープを聞かせた。解説を聴いてお経の意味を少し理解したようだった。これから立ち向かう病と死に、「生きること」「死ぬこと」「心の安らぎ」を知ってもらいたかった。

母は天津で生まれ育ち、結婚後は大連、南洋群島ヤップ島・ヤルト島、北京と終戦まで海外で暮らした。幼い頃、天津で祖母に連れられて、よくお寺に行ったそうです。その時『修証義』を祖母と一緒に唱えたと聞いていた。私が『修証義』のテープを聞かせると口元を少し動かし聴いていた。たぶん幼い時の記憶が甦ってきたのでしょう。兄の家に帰って聴けるよう『修証義』のカセットと機械を母に渡した。

再入院は二月下旬で、癌は四期（末期）まで進んでいた。今度は、放射線治療は出来ず抗ガン剤（普通人の半分位）の治療を受けていた。亡くなる三日前の五月四日に母を見舞って帰る時に、私と妻が知らない間に後を追って九階の病室から一階出口まで、母一人で杖をついて降りて来ていた。あの気力とエネルギーは何処にあったのか驚くばかりです。

亡くなった七日は妻と一緒に流山の自宅を朝早く出て病院に一時頃着き、昼食の世話をした。スプーン一杯のお粥しか食わず、体力の衰えを感じた。帰る前に水が欲しいと言うので、水差しでゆっくりに飲ませた。いま思えば、これが「最後に口にした水」となっ

てしまった。

自宅に戻りホッとしていたら兄から電話があり、「おぶくろが」と言うので、「いま見舞から戻ったよ」と言うのと、「母が亡くなった！」との知らせであった。あまりにも急な死に驚きと悲しみで涙が止まらなかつた。痛みもなく、長患いもせず、周りに迷惑もかけずに亡くなった。ただ冥福を祈るだけです。死に顔は看護婦さん葬儀屋さんも驚く程、穏やかで綺麗な顔をしていた。長患いの人、痛みのあつた人、事故死の人は厳しい顔で亡くなるそうです。

仮通夜の日には私一人で翌朝、人が賑わうまで『修証義』を繰り返して繰り返して、私の身を通して母に聴かせました。葬儀は愛知県三河の真言宗御室派総本山仁和寺直轄の洞雲寺住職鈴木一基方丈様に来て頂いて行いました。葬儀の前に方丈様のお許しを得て、龍泉院住職椎名老師様から平成三年に在家得度の際に頂戴しました「絡子」を付けて参列した。式が終わった時に参列者の中から方丈様に身内に他宗派の「絡子」を付けた人がいたが問題はないのか聞かれたそうです。方丈様が経緯を話されると納得されたそうです。

「まだまだ生きていてくれる」

と思っていた母の死、綺麗で皺一つない安らいだ仏像のような母の顔。母と『修証義』とのことを何時までも記憶に残すよう、ここに記さしていただきました。

戒名「清愛院俊室妙孝大姉位」
合掌

筍掘りは大盛況！

四月の定例参禅会が終わると、例年龍泉院の裏山にある竹林で筍を掘らせていただいている。

御老師の話によると、今年はいつよりも気温が低く筍の生長も後れがちだったようです。くもり空でしたが、竹林の中は清しい風が吹き、筍はあちらこちらで姿よ



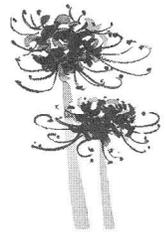
おお、良いのが採れたね

ろしく地から黒々と伸びていた。

恒例となつて楽しみにしている会員は多い。今では身支度はすばやく、筍掘りのコツ・技も皆伝授されて、次から次へと見事な筍が掘られていった。何本かまとめられた処へ一輪車がやってきて、すばやく筍を集めて持つていく。初期の頃はばらばらに散つて採り、各々が運び手をあちらこちらで呼ぶ声があったものだが、ここ数年筍掘り



名人の説明に、なるほど！



の一連の行程がスムーズに進行して短時間に効率よく集められる。筍は掘り立てをできるだけ早く調理したほうがおいしい。均等に配分した後、手際よく車に載せ家



筍を前に幸せいっぱい

路を急ぐ会員も多かった。自然の恵みを提供してくれるこの竹林は、筍ばかりでなく下草も豊かである。ユリ科の植物、蕨にうど、たくさんのラン類。とりわけ二〇年ほど前にはクマガイソウが群生していた。やがて心無い人に盗掘され、絶えてしまった。花卉の二枚が袋状になった大きな花を咲かせ、竹林の中では目立った。

盗人の庭でもきれいな花をつけていてくれればいいが、他人と花を愛であう気持はなからう。筍掘りを楽しみ感謝していただいていく者と盗人との心の違いを思いながら、筍料理の満載された食卓をしばらく堪能した。

施食会に当番奉仕団

例年八月一六日は龍泉院最大の行事、施食会が行われます。

施食会というのは、ご先祖や新盆の霊位、また生きとし生けるすべての精霊への大供養法要です。

当日は九時前に集合して、受け持ち分担を決めました。駐車スペースの枠を越えた車を効率よく誘導する必要があります。午後からの法要ですので、人の集まる前に本堂の飾りつけを先にします。

しまつてある五色の幕や柱飾りを取り出して、左右均等にたるみのないように張り出します。高さの数を確認しながら紐で固定。二メートルの脚立上の作業は危険



飾り終えて一息!

なので用心して台を支えます。例年ながら一番暑いときの作業ですから、いくら天井の高い本堂といっても、すぐさま全員が汗びっしょり。作業衣に黒々と汗の跡が残りました。



ぎゅっとしばって

手馴れているので、飾りの竹切りはもっぱら安本さんの役目。丁度いい高さの竹を切ってきてもらい、ひらひらの幡を飾り台と正面に付ければ大体格好が整う。

そんな時、冷たい麦茶を美川さん、大坂さんが持つてきて、小休止となる。今年は例年より早く飾りつけができた。曇り空ですこしは風もある。住職様が用意してくれた麦わら帽子をかぶれば、炎天になっても大丈夫。

早めの昼食をとり、決めた持ち場につく。車誘導係と本堂での案内係に別れ、集まりだした人の中に入っていく。

本堂では新盆の方たちとそうではない方と、左右に分かれて席につきます。やがて緋の衣をまとった

椎名老師がご随喜の僧と入堂し、法要が始まる。般若心経などのお経が唱えられ、修証義になると焼香がはじまる。列の最後に私たち参禅会員も並んで焼香を終えた。

法要が終わると、御老師が書かれた彫り数の塔婆を本堂前に並び、各家々に持っていくてもらった。陽も傾き少し風がでて、倒れた塔婆を並べ直し、本堂の飾り付けを取り外して、元の場所にしまいませす。施食会奉仕団は、夏の一日をいい汗たくさん流して役目を終えました。

来年は、龍泉院参禅会が発足して三〇年の節目にあたりませす。これを記念して、椎名老師、小畑さん、年番幹事でいまままで寄せられたいくつかの案件を検討しております。

ひとつは三年続いた龍泉院での一泊参禅を、場所を移し二泊の古跡を尋ねながらの坐禅会とする案。二つ目は一〇年振りの在家得度式の実施です。内容、日時等決まり次第、順次ご通知申し上げます。

お知らせ

龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜九時より(初参加の方は八時半までに来山のこと) 四月は八時半より坐禅作法指導
- 一、坐禅 第一炷 口宣、坐禅三〇分
第二炷 一〇分
第三炷 坐禅三〇分
- 一、講義 木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『正法眼蔵』の提唱を聞く。八月より「説心説性」
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散
- 一、参加資格 年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます
- 一、会費 無料
- 一、成道会坐禅 月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜(本年は一二月三日) 积尊成道を讃え坐禅、成道会法要後、法話を聴聞、点心を共にする
- 一、一泊参禅会 六月上旬、七炷の坐禅とご提唱を聞く

沼南雑記

参禅会記録()中は座談の司会者
平成一二年

●四月二三日 四〇名 (加藤 孝氏)

●五月二八日 三一名 坐禅・禅講後、筍掘り

●六月一〇日・一一日 二一名 (大坂晶子氏)

●一泊参禅会 於・天徳山龍泉院 幹事 杉浦上太郎氏、武田博志氏

●典座 松井 隆氏、武田博志氏
●六月二五日 二八名 (高野千代子氏)

●七月二三日 三二名 (安本小太郎氏)

●八月一六日 「龍泉院施食会」当番奉仕

●法話 木村誠治老師

●八月二七日 三一名 (徳山 浩氏)

●九月二五日 三一名 (寺田健二氏)

●九月参禅会での御老師の提唱は「説心説性」。寺庭の曼珠沙華の華鮮やか。この紅炎の華は仏を説き、仏性を説く。その談玄談妙の功德に預かる吾、火焰裏に立地して静聴す。ありがたし。

曼珠沙華咲く野に出でよ観世音

——鶏二——

▼参禅後外へ出れば秋雲高く、縹渺として湧いては消える。まさしく応無所住而生其心の仏心、一片の雲、一遍の秋空、すべてを捨て去れとの捨聖の声。仏事の肝要は諸縁を放捨する事との御老師の提唱が身に染みる。

▼明珠の編集の末端に参加させて頂きます。御指導御鞭撻御願ひ申し上げます。

▼オリピックが終わった。日本選手健闘ぶりに一喜一憂された人も多いことだろう。勝敗にかかわらず大舞台で自己ベスト記録が出せれば充分と思うが、その為には普段の精進が肝要に違いない。ふと坐禅に向かう己を省みる。

▼今春刊行された「明珠」合冊本に多くの方々よりお祝を頂戴しました。ありがたうございました。

▼編集に久光氏に参加していただきます。よろしく願ひします。

▼国の首長が音頭をとって盛んにIT革新を進めようとしている。

▼九月の長雨で日本列島は水びたしで通信網は寸断、情報が大もとでブツツリ途絶えた。住民の自主判断で避難した所が多い。こんな時、物無き時代を生き抜いてきた老人の進言が有効だった。システムの稼働しない時に個人の経験とチエが發揮されるとは…… (佇泉)

●発行/天徳山龍泉院 千葉県沼南町泉 千葉県沼南町泉 81 00471(91)1609
●印刷/岡田印刷株式会社 柏市高田1116-45 00471(43)3131